

# 根拠を明らかにし 登場人物の心情を読み取る力を高める授業の工夫

—— アクティブ・ラーニングの手法を取り入れて ——

古 川 知英子

はじめに

国語の学習は、全ての教科における要となっており、中でも「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の四領域において、「書くこと」「読むこと」は、最も大切であると考ええる。正しい読み取りができなければ、問題の答えを導き出すことができない。そして、自分の考えを書くこともできない。

現場に立つと、国語の学習における子どもの得意、不得意な分野が明らかに分かる。低学年の段階では、新たに習う漢字の学習をとっても意欲的に取り組み、新たに習う漢字を楽しみながら練習している。また、二年生の教材である、「ふきのとう」「スイミー」などの物語文は、物語の流れが明確で、登場人物のセリフも生き活きと描かれており、子どもたちも物語作品の中に入り込み、楽しみながら学んでいる様子が見られる。しかし、一方で、実際に本文には描写されていない、登場人物の心情を考え、まとめることを苦手としている子どもが多く、また、感

想やあらすじをまとめることに苦手意識をもっている子どもがいることに気付いた。

そこで、本稿では、「読むこと」の力を身に付けさせるための実践、自分の考えや経験を文章にまとめる「書くこと」の力を身に付けさせるための実践例をまとめ、考察を試みることにする。

## 一 学習指導要領における位置づけ

### 「書くこと」の目標

経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせるとともに、進んで書くこうとする態度を育てる。

【『小学校学習指導要領解説 国語編』(文部科学省)より(1)】

「書くこと」の目標では、「経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせる」ことをねらいとしている。この文言か

ら、小学校の低学年段階で、文章を書くための「はじめ」「中」「おわり」の文章構成など、国語の時間をはじめ、朝のスピーチや他の教科などでも身に付けさせる必要があると感じる。

本稿で述べる実践では、この文章構成に着目したワークシートの工夫についても述べていきたい。

#### 「読むこと」の目標

書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。

【小学校学習指導要領解説 国語編（文部科学省）より（2）】

「読むこと」の目標では、「書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせる」ことをねらいとしている。説明文においては、書かれている事柄の順序などの文章構成を知ることが必要となり、物語作品では、本文中に描写されていない心情なども想像を膨らませながら読む力を身に付けさせる必要がある。

そこで、本稿では、この「読むこと」の目標にも書かれているように、想像力を膨らませて読み取る学習の工夫について述べていきたい。

#### 二 国語科における「読むこと」「書くこと」の重要性

前文で「読むこと」の目標の中に、「楽しんで読書しよう」と

する態度を育てる」ことが大切であると述べられていた。読書教育について大村はまは、子どもに「読書日記」を書かせ、「ひとこと」という欄を設け、指導にあたっていた内容が書かれていた。その理由として、『大村はま・教室で学ぶ』の中で次のように述べられている（3）。

（前略）本を読むと、あるいは、読んでいるときでも、ふつと何か心に浮かぶことがあるでしょう。感想とか、考えとか、いうほどのものではなくても、何かの思いつき、何か心に引き出されてくることがあるでしょう、そういうものは、ちよつと書きとめておかないと、またふうつとなくなってしまう、こんなに心を動かされていること、忘れようがないと、それほどに感じたことでも、不思議に消えてしまふ、何かあったとは思ふが、それが何であつたか、はつきりしなくなっている。（後略）

ここから、長い文で感想をまとめるのではなく、短い言葉で、その瞬間感じたことをワークシートやノートにメモを残させながら読み取りを進める学習方法もとても大切であると感じた。また、石田佐久馬は、『再点検ほんもの国語授業』の中で、「書き手の心をとらえる」という重要性について次のように述べている（4）。

（前略）文章を読むとは、書き手の考え、すなわち書き手の頭の中にあることをとらえることである。むずかしく

いえば書き手の思想をつかむことである。(中略) 書き手は、自分の考えを読み手にわかつてもらうために、叙述を工夫し文章の進め方を考える。それが文章展開である。たとえ、思想そのものは単純であつても、それが文章となると、書き手はレトリックを工夫してあかも言おう、こうも言おうと苦心することになる。しかし、ここで大切なのは文章そのものではなく、その文章を生んだ書き手の思想である。だから、読み手は文章を手がかりとして、その奥にあるものをつかまなければならぬ。写真やテレビの映像だけでは真実がわからない。文章の語句―段落―書き手が何を伝えようとしているかをつかむことが大切である。

この中で、石田は、小学校五年生の教材「大造じいさんとガン」を例に挙げ、一文一文を抜き出し、ただ表面をなでるような読み方ではなく、特に大切だと思われる箇所を精読する手法を述べていた。また、石田(3)は、「文章の語句―段落―書き手が何を伝えようとしているのかをつかむことが大切である。」と述べていた。ここから、語句の確認、また、文章の構成、段落をきちんとおさえた上で読み取りの学習を進めることの大切さも再認識した。

### 三 授業実践1

#### (一) 現状と課題

本学級では、授業において自分の考えを意欲的に発表する子

どもが多くいる。また、物語文では、話の流れや出来事など場面の状況を適切に読み取っている姿が見られる。

しかし、その一方、登場人物の人物像や心情など本文中に直接書かれていない事柄に関して、自分の考えを述べることを苦手としている子どもが多いように感じる。

そこで、自分の考えの根拠を明らかにし、登場人物の心情を読み取る力を身に付けさせることを目的として授業実践を行った。対象とした学年は小学校三年生である。

#### (二) 課題解決のための方策

【方策1】 写真・イラストなど教材の視覚化の工夫

【方策2】 思考段階が分かるようなワークシートの工夫

【方策3】 子ども自身が学習の振り返りができる工夫

以下で具体的に述べていくこととする。

【方策1】として、写真・イラストなど教材の視覚化の工夫を試みた。近年、「クラスの誰もが分かる授業づくり」として、学級におけるユニバーサルデザインの視点が重要視されてきている。ユニバーサルデザインについて、桂聖は、『小三教育技術4月号』(5)の中で、「一斉授業の中ですべての子どもたちが授業に参加し、楽しく「わかる」ことができることを目指すのです。」と述べている。また、授業のユニバーサルデザインには、「焦点化・視覚化・共有化」を取り入れた授業作りが必要となってくる。以下で、桂が「焦点化・視覚化・共有化」を国語の授業を例に紹介している文を載せることとする。

### \*焦点化

教科で指導する内容を教え込み、明示的に教えることです。例えば、国語の物語文ならば、『気持ちが分かれるところに線を引きましよう』ではなく、『気持ちに分かる会話文に線を引きましよう』と発問することで、気になる子にも分かり易いし、理解力の優れた子も『気持ちは会話文で分かる』とメタ認知できます。

【『小三教育技術4月号』（小学館）より（6）】

### \*視覚化

音声言語や文字言語だけでは分かりにくい子どももいるので、写真、挿絵、動画、動作化等を、内容に応じて効果的に使うように工夫することです。

【『小三教育技術4月号』（小学館）より（7）】

### \*共有化

話合い活動を組織することで、ポイント・ポイントでの子どもたちの理解を揃えていくことです。

【『小三教育技術4月号』（小学館）より（8）】

以上で述べてきたように、小学校段階の子どもにおいて、絵や写真などの視覚的に分かりやすい教材の工夫、また、発問の仕方の工夫などのユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりはとても大切であると改めて実感した。そして、これまでの自身の実践から振り返ってみても、文章だけで書かれた文を読

む場合と、絵や写真を取り入れて行う場合とでは、子どもの反応が違ふと感じる。さらに、文章だけでは何を問われているのか瞬時に分からない子どもにとっては、絵や写真など視覚に訴える教材は取り掛かる際の手助けとなり、学習へ取りかかる時間が短くなると考える。

そこで、一つ目の実践として、小学校で広く扱われている掛図を多く使用し、子どもが教科書で目になっている場面を大きくした物を黒板にも提示し、今どのページを読んで学習しているのか明確に分かるように授業を進めた。

二つ目の実践としては、さまざまなカードの使用を行った。視覚的に分かりやすくさせるためにさまざまなカードを用い、授業で活用した。

#### 〈カードの例〉

##### 言葉のカード

・「いつ」「どこで」「だれが」「どうした」  
イラストカード

・「？」……出来事の確認の時に使用する。

・「♡（ハート）」……登場人物の気持ちを考える時に使用する。

【方策2】として、思考段階が分かるようなワークシートの工夫を行った。

一つ目に、子どもが書き込みができる冊子を配り、授業で活用した。この書き込みができる冊子を作製した意図として、教科書に、直接鉛筆や赤色鉛筆で線を引くことや、自分の考えを

書き込むことに抵抗をもつ子もいると感じたため、冊子を作製した。初めに、子どもにその時感じたことを、冊子には何でも書きこんでもよいという指示をした。そして、子どもに、その瞬間に感じた登場人物の気持ちなどをたくさん書いてほしいという願いを込め、冊子の使用を考えた。このたくさん書き込みを行う手法については、前文で大村はまも、「(前略) 感想とか、考えとか、いうほどのものではなくても、何かの思いつき、何か心に引き出されてくることがあるでしょう、そういうものは、ちよつと書きとめておかないと、またふうつとなくなってしまう(後略)」と、その重要性を述べていた(9)。

実際の授業場面では、冊子に根拠となる部分に波線を引き、その部分をもとにワークシートに考えをまとめるような指導を行った。また、ワークシートには、根拠となる文、自分の考えを書くための枠、挿絵や吹き出しなどを取り入れ、子どもの思考段階に即して、一つ一つ書き込める工夫を取り入れた。このことにより、スモールステップ方式で自分の考えをまとめていくことができ、理解が深まると考えた。

【方策3】として、子ども自身が学習の振り返りができる工夫を行った。「冊子から自分の考えの根拠を見つける。」↓「見つけ出した根拠を基に、考えをワークシートにまとめる。」↓「本文中の根拠を基に、自分の考えを発表する。」という一連の流れで学習を進めることにより、自分の意見に自信をもち、グループや全体の前で発表ができ、意見の共有を図ることができると考えた。そして、この活動が近年広く叫ばれているアクティブ・

ラーニングの形として実践できると考えた。

### (三) 実践の概要

- 一、対象・・・小学校三年生
- 二、教材名・・・「ちいちゃんのかげおくり」
- 三、単元名・・・場面の様子を想像しながら読もう
- 四、単元の目標・・・場面の移り変わりや情景を、叙述を基に想像しながら読み、自分の思いや考えを書いている。

本時の課題として、「家族みんなでしかかけおくりのときのちいちゃんの気持ちを読み取ろう。」と設定した。重点を置いた点として、これまで述べてきた方策1～3を実践した。

### (四) 授業の実際と考察

#### 〈導入〉前時の振り返り

前回学習したワークシートを見ながら、ちいちゃんの人物像、時代背景を再確認した。ここでは、「みんなよりも少し小さな女の子のお話でしたよね。」と確認を行った。

#### 〈展開〉場面の状況の確認

「いつ」「どこで」「だれが」「どうした」のカードを用い、場面の状況を読み取り、ワークシートにまとめた。

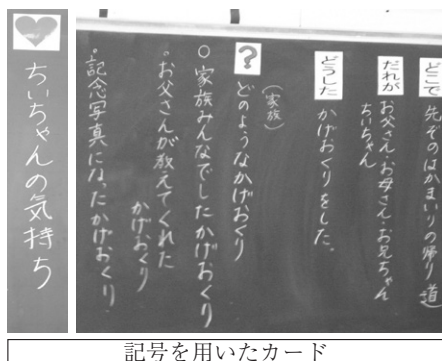
このカードを用いることにより、児童が本文から、各場面の中で起こっている状況の一つずつ整理ができ、後に考える登場人物の心情を考える手助けとなった。また、視覚的にも分かり

やすく、簡単にまとめることができた。

〈展開〉どのようなかけおくりであったのか、考えをまとめた。

【方策1】教材の視覚化として、「どのようなかけおくりであったのか考えるとき」は、「クエスチョンマーク」「登場人物の気持ちを考えるとき」は、「ハート」を用いて視覚的に分かりやすくする工夫を行った。

〈展開〉かけおくりをしているときのちいちゃんの気持ちを考える。



記号を用いたカード

ここでは、【方策2】冊子の活用と思考段階に即したワークシートの活用として、一人一冊教科書をコピーした冊子を配り、授業で学んだことをたくさん記入できるように工夫した。

〈終末〉全体での意見の共有  
終末では、考えの根拠を明らかにしながら自分の考えを述べる活動を行った。

以上のような展開で、

授業を実践した。このように、①本文から根拠を見つける。②ワークシートにまとめる。③発表・共有の一連の流れのもと展開される活動がアクティブ・ラーニングなのではないかと考えた。

#### 四 授業実践2

##### (一) 実践の概要

一、対象・・・小学校三年生

二、教材名・・・「三年とうげ」

三、単元名・・・登場人物の気持ちを読み取ろう

四、単元の目標・・・物語の組み立てを捉え、登場人物の気持ちの変化や情景を想像することができる。

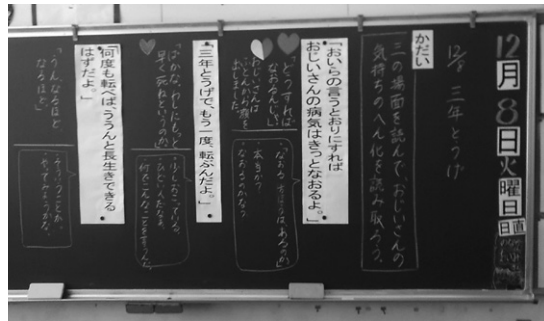
##### (二) 授業の実際と考察

本時の課題として、「3の場面を読み、おじいさんの気持ちの変化を読み取ろう。」と設定した。重点を置いた点として、これまで述べてきた方策1～3を実践した。

【方策1】根拠と共に書き記すことのできるワークシートの工夫  
【方策2】おじいさんの気持ちの変化をハートに色を塗りながら考える工夫

【方策3】根拠と共に自分の考えを述べることのできる学習形態

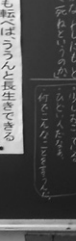
【方策1】として、根拠と共に書き記すことのできるワークシートの工夫を行った。



板書（ハートの教具を用い心情の度合いを示した）

ワークシートでは、上におじいさんの言葉や様子を本文中から抜き出し、書き記した後に、吹き出しにおじいさんの気持ちを書かせた。

【方策2】 おじいさんの  
気持ちの変化をハートに  
色を塗りながら考えさせ  
た。



「何度でも転ばうん長生きできるはずだよ」  
「うんなんなほじはるはじ」

板書（ハートの教

ここでは、ハート型の教具を用い、おじいさんの心情度が今のくらいなのか、子どもに考えさせ、ワークシートに色を塗りながら考えさせた。

【方策3】根拠と共に自分の考えを述べることでできる学習形態として、スモールステップ方式で自分の考えをまとめることにより、自信をもち、子どもが発言することを目指した。

そして、最後に自分がどのように考えた根拠と共に考えを述べ、学級全体で意見を共有することができた。

### （三）成果と課題

【方策1】写真・イラストなど教材の視覚化の工夫

【方策1】の成果を二つ挙げることにする。

一つ目に、場面の掛図を用いることにより、全員が同じ場面の絵を共有することができる中で、登場人物の考えを導き出しやすくする支援に繋がったと考える。

二つ目に、さまざまなカードを用いることにより、子どもの頭の中で今何を考えるべきことなのか視覚的に分かりやすくなったと考える。

【方策2】思考段階が分かるようなワークシートの工夫

【方策2】の成果として、学習の進め方を、①冊子から根拠となる文を見つけ、波線を引く。②ワークシートへまとめるという形で行うことにより、思考の段階に応じて考えを導くことができた。

しかし課題として、「ちいちゃんのかげおくり」において「どのようなかげおくりであつたか。」という問いに對して、考え方のよければ多様な考えが出る問いにおいてワークシートの記入欄が三つと少なく、多様な考えが出る国語の授業においてワークシートを用いる際の工夫改善が必要であると考えた。

### 【方策3】子ども自身が学習の振り返りができる工夫

根拠を明らかに段階をおって自分の考えをまとめることにより、子ども自身の内容に対する理解が深まり、多くの子どもが自信をもって手を上げている様子が見られた。そして、学級全

体で教師を中心として子どもの意見を共有することができた。

一方、課題としては、アクティブ・ラーニングの学習形態をさらに定着させ、日頃から子どもが主体となり、グループごとに分かれて意見を共有するという学習形態を身に付けさせ、全体で共有するという活動が進められることを今後の課題として指導していききたい。

## 五 「書くこと」の年間を通した教育実践

四月から、「書くこと」の力を身に付けさせることを目標に、書くことの単元において、文章を書かせ、それを教室に掲示をし、記録をしてきた。『作文教室』の中で清水義範は、作文について、「作文を書いてそれによって自分の考えをひとに伝えるということとは、総合的な国語力があってこそはじめてできることであり、それを見れば能力がぐつきりとわかるのである。」(10)と述べている。この言葉からも、低学年の段階からステップアップ方式で、「書くこと」の単元においてあらゆる文を書くことに積極的に取り組み、子どもの「書く力」を伸ばしていく必要があると考えた。

以下では、四月から自身のクラスで取り組んできた実践を振り返り、考察を試みたい。

四月は、「春がいつばい」という単元において、春に関わる言葉を挙げさせ、自分の経験と結び付けて文章に表す活動に取り組んだ。この単元は、子どもたちに四季の感覚を身に付けさせ、語彙力を増やす伝統的な言語文化を身に付けさせる単元で

もある。授業の進め方としては、子どもから、春を表す言葉をいくつか挙げさせ、思い出などを話し合った。その後、例文を示し、絵と文でまとめさせた。また、この「春がいつばい」は、年間を通して春夏秋冬と季節ごとに単元が設定されており、短い作文を書く単元としては子どもにも親しみやすいと感じた。今回は、初めて絵と文で書くという活動であったため子どももどのように書けばよいのか、形式を理解することに少し時間はかかった。しかし、自分が書きたいテーマが決まると、その思い出を絵と文で楽しみながらまとめることができた。教師の指示としては、「学校の登下校中、休みの日に会った生き物や、自然の様子などを考えてテーマ(題材)を決めましょう。」「題材が決まったら、その書いたものの思い出を書いてみましょう。そして、その時、どんな気持ちだったか書きましょう。」と指示をした。

次に、本単元の学習を通して「書く力」が、どのように変化したか。年間を通して見た、ある子どもの例を参考に考察していきたい。

### 春 「さくら」

まえ、こうえんでさくらを見ました。とてもきれいでかぜがふいたときすごくきれいでした。

### 夏 「すいかわり」

おまつりですいかわりをしました。ほのかちゃんとふうちゃんと行きました。すいかは、われなかったけど、さいご

にすいかを食べました。おいしかったです。

#### 秋「どんぐり」

土曜日に学校にどんぐりがいっぱいあったので、学校に行ってどんぐりをひろってきました。どんぐりをもつてかえって、どんぐりぶえをつくりました。どんぐりをけずって手がすこしいたくなりました。でも、音がなつてうれしかったです。

#### 冬「スケート」

わたしは小さいころスケートをしました。さいしょはうまくできなかったけど、おかあさんとやってみたら、すこしできるようになりました。さいごにはうまくできるようになりました。

以上で挙げた、ある子どもの年間を通して、本単元の学習における文章の変化を見ると、まず、文章の量が少しずつ増えていることに気付く。また、春の段階では、「何をしたか」「どんな気持ちであったか」という短い文でまとめられていた。しかし、夏には「誰と行ったのか」が増えている。秋では、どうしてどんぐりを拾いに行ったのか。「その行動を起こした経緯」も書かれ、「どのような気持ちであったか」に加え、「でも、音が鳴って嬉しかった」と自分の気持ちを述べる際の表現も豊かになっていることが見てとれる。冬では、「さいしょはうまくできなかったけど、・・・さいごにはうまくできるようになりました。」

と短い文の中で、文章の構成が整い、一連の出来事を上手くまとめることができていると感じた。今回は、ある一人の子どもの例を挙げたが、どの子どもの作品も、書く回数を重ねることに、深みのある表現ができ、全体の文章が流れに沿って書くことができていると感じられた。このように、短い文章ではあるが、年間を通して、自身が見聞きしたこと、その時の気持ちをまとめる学習を続けることにより、子どもの「書く力」は伸びていくと感じた。

次に、四月「今週のニュース」では、友達に知らせるために、身近な出来事から書くことを決め、出来事の様子や自分の気持ちを書くことを目標に、自分が経験したニュースをまとめ、その時の気持ちとともに書かせた。この際には、書くだけではなく、他の人のニュースを読み、感じたことを質問し合い、意見も共有させた。

五月「かんさつ名人になろう」では、丁寧に観察し、気付いたことや分かったことを工夫して書かせた。高木和子は、『小学二年生の心理 なじんだランドセル』の中で「書く」力は、国語の授業のみでなく、他教科でもつけることができる。例えば、生活科の授業の中では、二年生は野菜を育てるが、それを日々観察し、観察したことを文などに表すことも書く力をつけさせる。(11)と述べていることから、生活科で育てているトマトの観察記録とリンクさせて学習を進めた。この学習では、観察記録を書く際のポイントをいくつか指導し、その後、書かせた。書く際のポイントとしては、「大きさ」「形」「色」「匂い」「触った感触」を例示し、「〃のような」と喩えて書くという表

現もあることを指導した。

以下で、ある子どもの書いた文章を載せる。そして、子どもが工夫して書いた点に傍線を引くこととする。

(傍線部、稿者、以下同じ)

二十八センチメートルでした。はっぱの色は黄みどり色です。花の色は黄色です。はっぱの形は手みたいですよ。

わたしのミニトマトは元気です。大きさは八センチメートルくらいです。はっぱの形はぎざぎざでした。花がさいっていました。

生活科で書いてきたこれまでの観察記録と比較すると文章の表現がより分かりやすくなっていることに気付いた。このように書くポイントを明確に示す事によって、子どもは、意欲的に「はっぱを上から見たら星に見えました」「大きさは八センチメートルです」「はっぱの形はぎざぎざでした」など、具体的に書けるようになってきた。また、文章を書くことに困っている子どもに対しても、「色はどんな色かな?」「どんな形をしている?」「何の形に見える?」「触った感触はどんな感じ?」などと質問をし、書かせることにより、書くことが苦手な子どもに対しての支援にも繋がった。

六月「スイミー」では、文章の中の大事な言葉や文を書き抜き、それをもとにあらすじを書くことを目標に授業を進めた。「スイミー」は色彩豊かな作品で、さまざまな海の生き物が登場し、

子どもにとっても興味を示す物語文である。そのため、このワクワクとした気持ちを残したまま何か楽しくアレンジして授業が展開できないかと考えた。そこで、三つの段階を踏んで、最終目標の「あらすじをまとめよう」という学習を進めることができるようワークシートなどを作成して、取り組んだ。三つの段階は以下の通りである。①スイミー生き物図鑑 ②スイミー四コマ漫画(あらすじ文) ③スイミー四コマ漫画(絵)

スイミーには、面白い名前をしたさまざまな生き物が登場する。そこで、導入部において、子どもの豊かな想像力を生かして、物語に入らせたという願いがあった。そのため、初読をする前に、子どもに「ゼリーのようなくらげ」「水中ブルドガーみたいないせび」「見たこともない魚たち」「ドロップミたいな岩から生えているこんぶやわかめの林」「うなぎ。かおを見るころにはしっぽをわすれているほど長い」「もも色のヤシの木みたいないそぎんちゃく」などの生き物の絵を、教科書の挿絵を見る前に描かせた。すると、子どもたちは思い思いに想像を巡らせ楽しみながら描いていた。「見たこともない魚たち」では、大きな魚や、カラフルな魚を描いている子が多かった。また、「うなぎ。かおを見るころにはしっぽをわすれているほど長い」では、長いうなぎを想像して描いていた。最後に色を塗らせると色鮮やかな、子どもたちの思いが詰まった素敵な作品が仕上がった。その後、物語を読み、挿絵を見て、「このような魚だったんだ」と言っている子どももいた。その後、作品を読み、段落ごとに深く読みながら学習を進めた。

そして、後半部において、物語のあらすじを書く学習に入っ

た。あらすじを書く学習においては、ただあらすじを書くだけでは、子どもの興味を高めることができないのではないかと考え、物語のあらすじをおさえた上で、四コマ漫画を書く。という活動を取り入れた。スイミーの物語は起承転結で四つの場面に分かれていると考えた。しかし、すぐに四コマの絵で漫画にまとめましょう。という流れでは、子どもでも難しく描くことができない。そのため、ステップアップ方式で活動を進めた。初めに、全体で四コマの枠の中に、確認をしながら大まかなあらすじを簡条書きでまとめた。これは、全体で確認をしながら簡条書きでまとめることにより、その後に行う、絵で四コマ漫画をまとめる際に子どもたち一人一人が取りかかりやすくなると考え、この流れにした。

簡条書きの必要性については、森川正樹が『どの子も必ず身につく『書く力』』において、「簡条書きは『書くこと』の土台を作る」と述べ、簡条書きの効果について、「①書き出せる身体を作ること ②情報収集癖がつくこと ③子どもの中にインプットとアウトプットの回路ができあがることです。これらのことを通して、その子の『書くこと』の土台を作っていきます。(12)」と述べている。

以上からも、簡条書きでまずは書きたいことを整理することは、大切であると実感した。その後、同じ枠組みで前時で書いた簡条書きを参考に絵でまとめた。同じ枠組みに簡条書きにされた文を絵に表すという進め方を行うことにより、ほとんどの子どもがスムーズに描くことができた。中には、自分でセリフを付け足す子どももあり、物語のあらすじをおさえることがで

きたのではないかと考える。

九月「おおきくなあれ」(視写) この单元では、語のまもりや言葉の響きなどに気をつけて詩を音読することができるところを目標に学習を進めた。声に出して詩を読むことに加え、詩の形式についても指導を行った。詩はいくつかのまもり(連)で成り立っていること、また、その連と連の間は行間が空いていることや行を変えて、区切りを表しているなど、詩独自の書かれ方に気付いてほしいと考えた。そのため、まずは、詩の視写を行った。視写をすることによって、体感的に詩の形式を理解し、また写していく中で、繰り返し表現や詩独自の響きなどに気付く子どももいると考えた。その際に、何も書いていない紙であると、どこに何を書いたらよいか分からないため、あらかじめ文字を書く枠組みが書かれた紙に視写させた。子どもは、自ら詩を視ながらその通りに写すことにより詩の形式が少しでも理解できたのではないかと考える。

十一月「お話のさくしゃになろう」では、絵を見て想像したことから書くことを決め、「はじめ」「中」「おわり」のままとりのある短い物語を書くという目標の基、いつ、どこで、どんな出来事(事件)が起きたかを考え、「はじめ」「中」「おわり」のままとまりで構想を考えさせた。高木和子は、『小学二年生の心理 なじんだランドセル』の中で、「二年生においては特に、「文章に書く」とする題材に必要な事柄を集めること」「自分の考えが明確になるように、簡単な組立てを考えること」が大切になってくる。文章を書く前に書きたいことを簡条書きにし、見通しを立てるのである。この「見通しを立てる」という作業

はこれから先、中学年や高学年になっても、特に大切な学習の基礎である。」(13)と述べている。この箇条書きでまとめることに關しては、森川も述べていたように、文章を書く上ではとても大切であることを実感した。また、工藤順一は、『国語のできる子どもを育てる』の中で、文章の書き方について、「具体的に指導する。」(14)と述べていた。この具体例を示すことに關しては、自身も日頃子どもに指導する中で常々大切だと感じ、例示することを中心掛けていた。教科書に書かれた例文を読み、スムーズに書くことができればよいが、なかなか書き進めない子どももいる。そんな中、教師が例を示し、黒板に子どもがこれからするべき作業の見本を見せることにより、子どもは集中して耳を傾ける。そして、目で見ただけではなく、教師の書いた文章を声に出して全体で読むことにより、二度これから行うべき作業の確認ができる。時間は、少しかかるが私はこのような指導をすることにより、その後の子どもの活動に取リかかる時間が早くなっていると感じる。また、書くことが得意な子どもはすぐに書きはじめるが、何を書いたらよいかわからない子どもに対しては、教師の文章のある箇所を変えながら自分の言葉でまとめていくという活動を続けることにより、「書く力」は伸びていくと考える。そして、このような手立てはとても大切だと考える。以上のような流れでワークシートを用いて、学習を進めていくことにより、思い思いに想像を巡らせた物語が仕上がった。「はじめ」「中」「おわり」の構成の基、書くことを苦手としている子どもも最後まで書くことができた。また、高木が、「書いた文章を読み返す習慣をつけることも大

切である。書きっぱなしではとかく間違いも多い。必ず読み返すことによって、間違いに注意することができるようになる。」(15)と述べているように、最後に、一度読み、文字の誤りや文脈などの間違いに気付かせながら、文章を書かせた。四月から比べると、十二月に書いた子どもの作品からは、書く文字の分量も増えてきたことが明らかに分かった。

おわりに

本稿では、前半部において、「根拠を明らかにし登場人物の心情を読み取る力を高める授業の工夫——アクティブ・ラーニングの手法を取り入れて——」という視点で、これまでの実践を述べてきた。子どもは、写真やイラストなど視覚に訴える教材に關しては、とても興味を示し、授業に臨んでいた。また、登場人物の吹き出しを入れたワークシートや子どもの思考の段階に応じたワークシートの作成など、普段のワークシートに工夫加えるだけで、子どもの取り組みに対する姿勢が変化することが分かった。この経験からも、子どもの立場に立ち、発問の仕方や教材の準備に励んでいきたいと感じた。

後半部では、自身のクラスで取り組んできた、「書くこと」の年間を通した教育実践について、揭示教育の必要性という観点についても考えながら、考察を行った。

小学校六年間という期間は、初めてひらがななどの文字に触れて文章を書きはじめる一年生の段階から、自分の考えを筆者の意見をもとに考え、文章にまとめる六年生の時期まで、「書

くこと」の指導方法は多岐にわたると考えられる。そして、各発達段階に応じた「書くこと」に対する指導方法を学び、実践することによって子どもの「書く力」は高まっていくと考える。このような背景を念頭に置きながら、書くことに対して苦手意識をもっている子どもに対しても、書くことに対する達成感を与えつつ、また、書くことが得意な子どもには質の高い「書く力」を身に付けさせるため、ワークシートの工夫、声掛けの方法を日々、模索していきたいと感じた。また、年間を通して教室の作品掲示の大切さについて考えてきた。子どもは、掲示されると他の友達の作品に目を向け、ワクワクしながら見ている姿が見られた。この姿からも、教室には、子どもが書いた作品をすぐに掲示し、そこには一言コメントをつけ、子どものやる気を高めていくことも大切だと感じる。これからも、子どもの作品を認め、「書く力」を身に付けさせられるよう日々、邁進していききたい。

註

- (1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 国語編』  
平成二十年 東洋館出版社
- (2) 註(1)に同じ。
- (3) 大村はま 『大村はま・教室で学ぶ』 平成二年 小学館
- (4) 石田佐久馬 『再点検ほんものの国語授業』  
平成十四年 東洋館出版社
- (5) 塚本英司 『小三教育技術 四月号』平成二十七年 小学館
- (6) 註(5)に同じ。

- (7) 註(5)に同じ。
- (8) 註(5)に同じ。
- (9) 註(3)に同じ。
- (10) 清水義範 『清水義範の作文教室』 平成七年 早川書房
- (11) 高木和子 『小学二年生の心理 なじんだランドセル』 平成十二年 大日本図書株式会社
- (12) 森川正樹 『どの子も必ず身につく書く力』  
平成二十五年 学陽書房
- (13) 註(11)に同じ。
- (14) 工藤順一 『国語のできる子どもを育てる』  
平成十二年 講談社
- (15) 註(11)に同じ。

付記

恩師、下西善三郎先生の退職記念の原稿をまとめつつ、大学院時代の思い出が蘇ってきます。ゼミの時間には、『伊勢物語』の原文をゼミの仲間と読み合い、変体仮名を学んだこと。また、研究テーマである『古今和歌集』の読み取りに関しては、一つの和歌に対して、さまざまな解釈があるという和歌の魅力についてもご教授いただきました。いつも穏やかな笑顔と優しさでご指導いただけたことに感謝申し上げます。

今後も、学生時代に学んだ古典文学の面白さを子どもに伝えつつ、あらゆる教育実践に取り組み、精進していききたいと思います。下西先生の益々のご隆盛を祈念しております。

(埼玉県富士見市立みずほ台小学校教諭)